

日本の大学における英語の知識を利用した フランス語教育の可能性

武内 英公子

TAKEUCHI Ekuko

Université de Kobe

VZC05125?nifty.com

Selon Choi E-Jung qui était co-animatrice de notre atelier, en Corée, dans le système éducatif actuel, tous les élèves apprennent l'anglais comme première langue étrangère dès l'école primaire ; par la suite, la plupart d'entre eux auront l'occasion d'apprendre une deuxième langue étrangère au lycée, et certains à l'université. Dans cette situation, les élèves sont fortement motivés pour apprendre l'anglais. Cette situation n'est pas nécessairement la même pour leur deuxième langue étrangère. En ce qui concerne le français, il y a une certaine quantité d'étudiants qui veulent apprendre le français à l'université, mais ils s'arrêtent souvent au niveau débutant et ne poursuivent pas leurs études à un niveau plus avancé. Afin de remédier à cette situation et de favoriser le multilinguisme parmi les apprenants de langues étrangères, Choi E-Jung et ses collègues coréens proposent des cours de français enseigné en anglais. Le but des cours est évidemment l'apprentissage du français, mais il faut que les enseignants comprennent bien que cet apprentissage sera d'autant plus efficace qu'il se fait par l'usage de l'anglais et par la co-existence de plusieurs langues et cultures.

Par contre, au Japon, cette méthode d'enseignement n'est pas encore suffisamment développée. L'application à l'enseignement du français dans les universités japonaises est-elle possible en prenant en compte la situation de l'enseignement des langues au Japon, forcément différente de celle en Corée ?

今回崔伊廷氏とともに主宰させていただいたアトリエでは、崔氏に、韓国での英語学習の熱意が、学生のみならず国を挙げてのものであること、その熱意と英語の知識を利用した大学のフランス語教育が、どのように学生に受け入れられているか、について具体例を交えて話していただいた。一方日本の大学では、学生の英語の知

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

識を利用した外国語教育はまだ一般的ではないが、多言語学習というコンテキストの中での効率の良い外国語学習について考えれば、日本の大学でも、こうした方法の効果や実践方法についての研究と、実際の応用についてもっと真剣に検討されてもよいのではないだろうか。

この論考では、英語の知識を使った外国語教育の利点や方法論について述べた欧州評議会の報告書を参照することによって、日本の大学における英語の知識を活用したフランス語学習についての実践の可能性について考察したい。

参照する報告書は、現用語のための欧州研究所 Le Centre européen pour les langues vivantes の 2000-2003 年度プログラム「効果的にさらにもう 1 言語学ぶ—ヨーロッパにおける 3 言語目の教育と学習: 英語の次に第二外国語として学ぶドイツ語」プロジェクトというタイトルで、欧州評議会によって発行されているが、効率的な学習を促進するという観点から、すでに学んだ英語の知識を利用したドイツ語学習の具体的な方法論を論じている。そもそも欧州議会は複言語主義を標榜しているが、複数の言語を学ぶためには効率的な学習が不可欠である。

まずグローバル化する世界において、欧州評議会が語学政策の中で推進しようとしている複言語主義の理念とは何なのだろうか。欧州評議会のサイト http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Division_FR.asp によれば、複言語主義 le plurilinguisme の理念は、ヨーロッパ市民すべてが複数の言語における一定レベルのコミュニケーション能力を獲得する権利があり、しかも生涯に渡って、また必要に応じて獲得する権利がある、というものであり、それは、言語の多様性 la diversité linguistique、相互理解 la compréhension mutuelle、民主的市民性 la citoyenneté démocratique、社会的団結 la cohésion sociale の実現を保障するためである。このような考え方は、ますます進行するグローバリゼーションへの対応を迫られている日本の大学のフランス語教育においても指針となりうるものであろう。

というのも、これらのコンセプトの最も重要な部分は、1 人の市民が生涯に渡って、習得する言語のレパートリーを充実させていく権利があるという点だからである。欧州評議会のサイトでは、複言語能力を発達させ使用することが可能となるのは、複数の目標言語の学習を個別に、それぞれの学習の間に何の関連性も持たせずに学ぶのではなく、その学習プロセスにおいて、あるいはコミュニケーションの場で使う際に、それぞれの言語が相互に影響を受けることによると述べられている。このような見地に立てば、教育機関における外国語学習の役割の一つは、学習者のニーズに応じた目標言語の学習戦略を決定し、統合的な学習メニューを学習者に提案し、それを実践してもらう道筋を示すことだ。というのも、ある外国語を学び続ける、あるいは必要になった時に再び学ぶためには、学習が効果的で自立的なものでなくてはならないからである。

これらの学習戦略を習得することは、個々の語学学習においても当然有効であり、クラスにおける語学学習の重要な部分になりうる。つまりこのプロジェクトが目指すのは「より効果的に、母語やすでに習得した外国語の言語的知識や学

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

習経験が意図的に統合されるように、二つ目以降に学ぶ外国語教育や学習を構築する方法を学ぶこと」である¹。

ところで、伝統的な語学教育において異なる外国語は個別にきちんと分けて教えるというのが普通であったのに対し、こうしたやり方が有効だと考えられるようになったのは、1990年代に第一外国語の学習と第二外国語の学習には質的にも量的にも違いがあるということが徐々にわかってきたからである。例えば、この時代に現れたモデルの一つである因子モデル *le modèle factoriel* によれば、学習者は、ある言語を学習した後、別の言語を学習する際に、前の言語の学習で適用されなかった要素を付け加えていく。であるから第一外国語の学習と第二外国語の学習の間には、より体系的でダイナミックな学習プロセスという質的に大きな飛躍が想定される。つまり学習者は外国語学習において習得した認知的および情動的経験を、その後に学習する別の外国語の学習に明示的に統合していくことによって、この質的な違いを有効に利用しているのである。もし学習する第二・第三外国語が言語的に近いものであれば、この学習経験を言語的な側面により入念に結びつけることができるし、逆に遠いものであれば、外国語の学習ストラテジーと認知的な側面が利用できる。私たちが問題にしているのは、英語学習の後のフランス語学習であるので、言語的な側面からも英語の学習を積極的に利用していくことでフランス語学習をより効果的に進めることができるだろう。学習対象となる二つの外国語が言語的に近いものでない場合に特に言えることであるが、教師は、学習者の第一外国語、今の場合英語であるが、を完璧にマスターしている必要はない。彼らがまず活用するのは、言語の知識そのものではなく、むしろそれまでの言語学習において学習者が発達させた言語的潜在力だからである。であるから以前の言語学習の経験は全く無駄にはならないということになる。このような観点に立てば、第二外国語の学習は、まったくの初歩から始めなくてすみ、より早い進歩と、より高度な学習内容が可能となるのだ。

このように、学習者の個別の複言語能力を利用したフランス語学習は、十分適用可能な学習方法であり、グローバル化する社会において、こうした学習方法の必要性はより増してゆくことになるだろう。

さらに、こうした第二外国語教授法をどのように構築するかという点で最も重要なのは、実際の授業において言語間の語彙や構造的な違いを問題視しないということである。複数の外国語は個別に教えるべきという教授法の理論的ベースとなっていた対照言語学においては、一見似ている語彙や構造の違いが、学習者が新しく学習する言語を使用する際に間違える主な原因であるとして、誤りを減らすためには、異なる言語はそれぞれ関連性を持たせず個別に教えたり学んだりするのが適切であるとされていた。しかしながら、複言語主義的なコンセプトにおいて、すべての

¹ Le projet visait à étudier les moyens de structurer l'enseignement et l'apprentissage des langues tertiaires pour que soient délibérément intégrées – et de manière plus efficace, les connaissances linguistiques et expériences d'apprentissage des langues acquises au préalable par l'apprenant (langue maternelle, première langue étrangère). p.5

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

学習者は外国語学習の過程で発揮され分化していく言語への基礎的な適性があるのだから、言語システム間での「干渉」の問題は、教授法的配慮の中心にはならない。最も重要なのは、「転移」の問題であって、ある外国語の学習とすでに学習した外国語学習の内容を、言語学的知識、言語的な経験、言語学習の経験といった観点から、どうやってそれらを関連付ければ、学習者がより効果的な学習ができるようになるかということなのである。

つまり第二外国語教育と学習における一つの重要な役割は、学習者がすでに知っている言語と同じ、あるいは似ていると認識できる、新しい言語の言語的形式に集中させることなのである。この報告書においては、英語学習の後のドイツ語がテーマなので、語彙や文章構成・語形成といった文法構造においてかなりの類似があり、学習を加速させうるポジティブな「転移」が期待できる。

このようにして、第二外国語の中に「理解できるスペース」が少しずつ作られていき、学習者は、識別できることや知っていることと、違っていることや相反することを同時に付け加え統合することによって、そのスペースを拡げていくことができる。ここで強調しなくてはならないのは、以前に学習した言語の「転移しうる」これらの語彙や文章構造を活用することは、まず何よりも第二外国語の中の、特に読むという技能においての、「理解できるスペース」を発達させることが目的だということだ。

もちろん新しい言語を話したり書いたりする訓練をしながら積極的に発信能力を発達させていく過程で出会う、直接の関連はないかも知れなくても明らかな相違が見られる言語学的な現象についても、きちんと議論しなくてはならない。これを考慮しないと、「干渉」の作用に陥ってしまい、それによって新しい言語を誤って使用してしまうかもしれない。例えば、母語や第一外国語との類推から、文章構造、話す際の発音やイントネーションやアクセント、綴りなどを間違える可能性があるということだ。しかしながら、言語学的な側面からのアプローチとは別に、第二外国語学習のこうしたやり方のもう一つの本質的な役割は、外国語学習の経験とすでに獲得した学習プロセスを関連付け、それらを活用し拡大することで言語学習の効果を強化することなのである。そのための学習ストラテジーといった外国語の学習プロセスの方法論をより詳細に検討しなくてはならない。

単に英語の言語学的知識をフランス語学習に利用するという観点からだけでなく、以前の言語学習経験を別の言語を学習する際に生かす学習ストラテジーを発達させれば、獲得した学習ストラテジーを、さらに英語能力を伸ばすことにも利用できるだろう。

そもそも言語学習ストラテジーという考え方は、言語の学習が成功するかしないかは個々の学習者によること、そして学習者が学習する機会を十二分に利用できるかどうかによることがわかってきたことにより出てきた考え方であるが、これは学習者が外国語の自らの学習をコントロールし、向上させるために必要な活動であり、レベルの高い自立学習を育て、効果的な学習を行う鍵となる。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

レベッカ L. オックスフォード氏によれば、学習ストラテジーとは、「学習をより易しく、より早く、より楽しく、より自主的に、より効果的に、そして新しい状況にすばやく対処するために学習者がとる具体的な行動」そして「すべてコミュニケーション能力²を高めるために用いられる」ものである。こうした考えに基づいて学習者中心の教授法は生み出されることになったのだ。

また、学習ストラテジーは学習者自らが使うものではあるが、ストラテジー能力をさらに伸ばすにはどうしても教師の役割が重要になる。言語学習ストラテジーは、目標言語に直接かかわる記憶、認知、補償という3つのストラテジーからなる直接ストラテジーと、メタ認知、情意、社会的という3つのストラテジーからなる間接ストラテジーから構成されるが、学習者のニーズに則したストラテジーと学習メニューの決定を語学学習の専門家である教師が担うことで、学習がより効果的になるからだ。このように学習者中心主義における教師は、伝統的にそうであった「生徒の無知を「『直さねばならない』医者のような役割を持つ権威者」から、「生徒の学習ストラテジーを明らかにし、学習ストラテジーの訓練を行い、学習者の自立を助ける」ファシリテーターのような存在も担うようになるだろう。

以上述べてきたように言語学習ストラテジーの習得によって複言語主義の実現が可能になるという観点から、日本の大学における英語の知識を利用したフランス語教育を考えることで、英語の知識を利用したフランス語教育はより充実したものになると同時に、より実現の可能性も高められるだろう。

韓国ほどの英語熱はまだ見られない日本では、英語の知識を利用した外国語学習についての研究は韓国ほど進んでいない。昨年のランコントロールでも、英語の知識を利用したフランス語教育を実践する合理性（例えば英語という言語の地位の相対化）について考察したが、具体的実践例は例示できなかった。しかしこの分野において先行している欧州での研究および韓国での実践を参考にすることによって、日本の大学におけるフランス語教育においても応用される機運が今後出てくる一助になればと思う。

Références bibliographiques :

Le projet « Apprendre efficacement plus d'une langue – l'enseignement et l'apprentissage d'une langue tertiaire en Europe. Exemple: l'allemand comme deuxième langue étrangère après l'anglais », réalisé dans le cadre du programme d'activités à moyen terme 2000-2003 du Centre européen pour les langues vivantes (Graz) en coopération avec le Goethe Institut.

レベッカ L. オックスフォード(1994),『言語学習ストラテジー—外国語教師が知っておかなければならないこと—』, 凡人社.

² Canale & Swain (1980) による包括的なモデルによれば、コミュニケーション能力は、文法能力/正確さ、社会言語学的能力、談話能力、ストラテジー能力、の4項目で測られる。